

竹中勝男は日本のキリスト教をどのように理解したか

TAKENAKA Katsuo's Understanding of Christianity in Japan

李 元 重

LEE, Wonjung

本稿は、竹中勝男が社会事業と関連して日本のキリスト教をどのように理解したかを考察した。竹中によると、近代化が進んでいる明治初期と中期の日本社会において、キリスト教は、医療、教育、社会改良などの社会事業および社会主義思想の導入に先駆的な役割を果たした。しかし、日本社会の産業化の結果、社会事業の概念と実践において中心的になったのは社会科学と公的機関であり、日本のキリスト教の役割は協同的、宗教的のものとして制限された。同志社大学文学部厚生学専攻の設置はその変化の象徴として考えられる。

This article studies how Katsuo Takenaka understood Japanese Christianity concerning social work. According to Takenaka, in early and middle Meiji Japan which was progressing toward modernization, Christianity in Japan made a pioneering contribution to medical work, education, social improvement, and the introduction of socialism. However, due to the industrialization of Japanese society, social sciences and the public institution became the central part of the idea and the practice of social work, which made the role of Japanese Christianity limited as a co-operative and religious one. Therefore, the establishment of Major of Welfare Study at the School of Literature in Doshisha University must be a symbolic change.

I はじめに

竹中勝男（1898－1959）はキリスト教の社会的な意味と役割に注目し、同志社大学文学部神学科の中で社会事業専攻を設けた。その後、1948年同志社大学文学部社会学科を創設し、今の同学の社会福祉学の発展に大きく寄与した。同志社大学がその歴史において、とりわけ社会事業の分野で卓越した人物を輩出してきたことを鑑みれば、竹中の果たした役割は非常に重要だと思われる。しかし一方では、竹中に関する研究は決して多いとは言えない。⁽¹⁾

本研究の目的は、竹中勝男が日本のキリスト教をどのように理解及び認識したのかを明らかにし、それらを批判的に検証することである。同志社大学文学部神学科を卒業し、アメリカでも神学を修めた竹中にとって、キリスト教は彼独自の問題意識の出発点にあり、社会事業の研究を進めるなかでも重要な地位を占めていた。その意味で、竹中のキリスト教理解に着目し分析した梅木真寿郎の研究は竹中の仕事を理解する一つの軸を提示するものとして評価できる。⁽²⁾ところが、社会事業はそもそも実践の問題であり、竹中にとってその実践が行われる現場は日本にほかならない。キリスト教社会事業を想定する時も、竹中にとって実践的に具体性を持つのは、日本のキリスト教でなければならない。それを認めれば、竹中のキリスト教一般に関する認識と理解だけでなく、近代日本という歴史的、地理的現場におけるキリスト教について、どのように理解、認識したのか、またそのような認識と理解がどのように変化したのかなどを問わなければならない。そのような点から問うことは彼の社会福祉理論の形成と同志社社会福祉学の背景を説明する一つの手掛かりになるとと思われる。

本稿では以下、竹中が日本のキリスト教をどのように理解したかについて、次のような論点を明らかにする。竹中は、歴史的に明治中期までは、日本における社会事業と社会主義思想に対するキリスト教の貢献を評価している。しかし、日本社会の近代化・産業化の進展に伴って、キリスト教、とりわけプロテ

竹中勝男は日本のキリスト教をどのように理解したか

スタント教会の意義は宗教的な側面に限定されるものとして見ていた。そのような認識は、日本のキリスト教に対して包括的な視点が欠如しているものであり、日本のキリスト教を信仰や精神といった内面的な事柄に集中させ、抽象化した。また、社会事業の概念と特質についても、竹中にとって日本のキリスト教はその中心的な位置を失っていた。その具体的な根拠として、竹中が主導した同志社大学文学部神学科における社会事業専攻の設立と1940年以降の所属変更は、社会事業と神学を切り離し、世俗化する経過だと考えられる。

II 竹中勝男のキリスト教理解

1 社会問題に取り組むキリスト教

梅木は、竹中のキリスト教理解について、次の三点に注目している。一つ目は、アメリカの神学者ウォルター・ラウシェンブッシュ (Walter Rauschenbusch) と彼の「社会的福音 (Social Gospel)」の影響について。二つ目には、竹中の初期著作と考えられる『基督教社会思想史』と彼が翻訳した『キリスト教社会愛史』が挙げられる。三つ目としては1930年代のいわゆる「社会的基督教」に対する態度である。このような論点を考察した上で、梅木は竹中がキリスト教の理念に基づいた社会観による「基督教社会事業の理論的構築を探究した⁽³⁾」と評価している。

このような評価は、上記の資料から読み取れることとしては妥当だと考えられる。しかしそれは竹中の初期の著作を中心とした結果、彼のキリスト教に対する通史的な視点を欠いている点が問題として指摘できる。また、ラウシェンブッシュの影響についても、それが竹中のキリスト教理解に決定的なものであったと見るのは難しいように思われる。なぜなら、ラウシェンブッシュにとっていわゆる社会的福音 (Social Gospel) は実践的な課題を提示するものであって、その内容は「社会秩序をキリスト教化する」ことであつた⁽⁴⁾。それは、

キリスト者がキリストと同一視する倫理的信念と社会を調和させることを意味した。⁽⁵⁾ 社会的価値と意味が極めて強調されるものの、ラウシェンブッシュにとってキリスト教は、中心的位置から降ろされることではない。しかし竹中の場合、後に詳述するが、彼の社会事業の研究が進めば進むほど、一方で日本社会の産業化の進展に従って、キリスト教は社会事業の実践において中心的意義を失っていく。

竹中のキリスト教理解は、概念的、抽象的と言うよりは、歴史的、実践的な面をより重要視する。たとえば彼はこのように述べている。「基督教はその各時代に於て、その社会に対する一定の態度の中に表明されて来たと観ることができる。(中略) 基督教は各時代を通じて、決して抽象的観念の上に発達して来たのではなく、常に具体的、実践的、倫理的態度の中に表現されて来たのである。」⁽⁶⁾ ここでの「一定の態度」とは、観念的あるいは受動的な姿勢ではなく、キリスト教の福音理解に基づいた実践として解釈できるだろう。竹中は、「基督教会は、その初代原始の時代から、何等かの意味でその信徒の社会生活に対して、関心を有したことが事実である」⁽⁷⁾ とし、1930年代のキリスト教と社会学の研究風潮についても、「研究が主としてその理論構造に集中され、その実践的、歴史的資料に関する調査的研究が欠けて居る点を痛感」⁽⁸⁾ するとの問題意識を持っていた。

しかし、そのような言説は、竹中が様々なイデオロギーや思想を軽視していたということを意味しない。むしろ、キリスト教の社会的な実践と直接関係する社会主義や資本主義といった政治および経済思想には強い関心を抱いていた。「経済史観の社会的考察(一)」⁽⁹⁾ は、その代表的な論文であり、竹中はこの小論で、マルクス主義の経済史観を、「社会学的方法によって考察」している。彼がこのように取り組む理由は、マルクスの社会理論の影響を受けたキリスト教の信徒と同調者がマルクス主義の唯物論と階級闘争を肯定する恐れがあったからである。⁽¹⁰⁾

けれども、マルクス主義に対する批判が、竹中の理解するキリスト教において直ちに資本主義の肯定に繋がるわけではない。「資本主義経済組織の倫理的批判：ウラード教授『現代の経済道徳と耶蘇の倫理』について」⁽¹¹⁾で、竹中は批判の矛先を資本主義にも向かわせた。「イエスの倫理原則を、経済過程に適用する事、即ち産業社会に於て恰も『汝自身の如く汝の隣人を愛する事』は、事実資本主義競争の射利社会の原則として不可能」ということを直視しながら、⁽¹²⁾「階級闘争の理論によるマルクス歴史観も、資本主義産業社会の道徳的解決に於て、イエスの倫理原則の反対に立つものである」として、マルクス主義が資本主義の問題の解決にならないと主張した。⁽¹³⁾マルクス主義でもなく、資本主義でもない。そうであるならば、キリスト教が打ち出すことになるのは何なのか。近代資本主義の矛盾の中、そこでキリスト教が社会に貢献できるのは人格的革命を起こすことだった。

自己利得、国家的優越、階級的支配—射利社会、戦争、経済的革命的のいづれに於ても一に対してイエスの倫理は人類の共通善を阻害する一切の勢力に対する精神的戦争を敢行し、それを自制の精神中に持来す。その選択は進化の革命の間に非ずして二個の革命中にあり。二個の革命とは契約に基づく経済社会の自発的変革と強制による経済社会の急進的倒壊とである。それは新社会に対する共同の計画か、然らざれば闘争である。如何なる社会に於ても平和的な革命は、若し特権階級が自発的に必要なる変化の代価を払うときのみ可能である。然らざればフランス、ロシヤの革命の惨を回避するは困難である。⁽¹⁴⁾

つまり、竹中にとってキリスト教は、兄弟愛と自己犠牲というイエスの倫理の徹底的な実践によって資本主義社会の諸問題と矛盾に対応し、それを変革するものであったと言えよう。

2 近代社会におけるキリスト教の限界

竹中はキリスト者、あるいは神学者としてはキリスト教について護教的であったが、同時に社会科学の研究者として、とりわけ産業革命以降、複雑化していく近代社会におけるキリスト教の限界についても自覚的だった。近代社会は、中世西洋のように宗教権力によって社会が支配されるものではない。したがって、「宗教はもはや国家乃至は社会团体に対する組織的統制力を制限され、私的事件の分野にその本来の使命を見出さねばなら」ないものである⁽¹⁵⁾。つまり、上述したような、キリスト教が社会の様々な問題に対してイエスの倫理を実践するという使命それ自体は変わらないが、その実践の方法においてはかつてのような統制権力を行使することはできない。そこで竹中は、主にフランス、ドイツ、イギリスのキリスト教社会事業の事例から、キリスト教が産業革命以降の社会問題に取り組む際に持つ、三つの特色を挙げている。

一つ目は、「社会事業乃至社会改造運動の統制的組織の方面より観れば、いづれも宗教団体は国家或ひは公共団体の統制機関に対して協同的、従属的關係に立つて居る事である」⁽¹⁶⁾。ドイツ、フランス、イギリスなど、それぞれの国によって教会と国家の關係の様子は違うものの、国家の律法に依存し、その法律の統制を超えることはできない。二つ目は、「その取扱へる問題が産業革命後の一般社会事業に於る対象に共通せる如く、経済的問題に關係せることである」⁽¹⁷⁾。具体的には、労働者組合運動や消費者組合運動など、社会の経済的な側面に関わる運動である。三つ目は、社会教化事業である⁽¹⁸⁾。青年教化事業、貧民救済および教化事業、刑務所改良事業、禁酒および社会矯風事業などがそのような例である。これらは要するにキリスト教社会事業の統制組織、対象、機能についての特色だが、第一と第二の特色は必ずしもこのようなキリスト教社会事業に限られるわけではないことが指摘されている。というのも、それらは政治的、社会的な側面を有しており、そうした側面に対してはキリスト教が社会科学の研究成果を認めなければならないからである。

今日の教会は貧乏の問題に関しては、之を経済学又は他の社会科学の指摘する事実を認め、その科学的方法を信頼すると同時に、その対象（救済、改造）に於ても、科学的、技術的に基礎付けられた独自の方法を承認し、それに対して可能なる協同と貢献をなすべきである⁽¹⁹⁾と考える。

キリスト教はかつてのような国家と社会を統制する立場からは、その理想とする倫理の実践、つまり社会事業ができなくなった。社会事業の現場であり対象となる社会自体が、産業革命以降は極めて複雑化した。しかし一方では社会科学という学問分野も発展したので、竹中は、そのような専門的研究を用いて社会事業を展開しなければならないと主張した。これが文学部神学科に社会事業専攻を設立した理由である。キリスト教が本来の使命を遂行するにはキリスト教社会事業は欠かせない。しかし、それを「素人芸」にすることなく、社会事業の専門家を養成するためには社会に対する科学的な探求が要求されるからである⁽²⁰⁾。

竹中にとってキリスト教は歴史のなかで、社会に対してイエスの倫理を実践するものであった。イエスの倫理の実践は、キリスト教の根本にかかわる問題であり、近代社会になってからもそれは変わっていない。近代資本主義社会の諸問題の解決に必要なのは、マルクス主義の階級闘争ではなく、キリスト教がイエスの倫理を実践することである。しかし、宗教改革と啓蒙主義時代以降の近代社会でキリスト教は政治的権力と切り離されていく一方で、産業革命によって社会と文化が細分化し、そのような社会に対する科学研究が進んだ。そのような背景を考慮すれば、キリスト教が社会問題に対する理解とその取り組みにおいて社会科学を必要とするのは必至と言える。社会科学がキリスト教の価値を退けるものではない。キリスト教が社会の中で、特有の価値を表現できる場所があると竹中は信じていた。彼はこのように述べている。「社会生活に於ける根本的な課題は、道徳的革新と深化なくしては、又神の子としての連

帯責任と犠牲なくしては到底解決」できない⁽²¹⁾と。人間の道徳的・人格的な革新と深化なしでは、社会問題の解決に至らない。それを成し遂げるのはキリスト教であると、竹中は社会におけるキリスト教の意味を理解していたのである。

Ⅲ 日本のキリスト教に対する竹中勝男の理解

竹中が社会事業に関連してキリスト教をどのように理解したかは上述した通りである。次は、竹中が日本におけるキリスト教をどのように認識し理解したのかを論証する。その問題は、『日本基督教社会事業史』（中央社会事業協会社会事業研究所、1940年）に集約されていると言える。本著を出版した中央社会事業協会社会事業研究所は、貧困問題、保育問題、被差別部落問題など日本の社会問題と社会事業に関する様々な研究書と調査書を出版したが、1938年にヨーロッパで大戦が始まってからは戦時下における欧米諸国の社会事業についても関連研究書を刊行した。また同時期には月刊誌『厚生問題』⁽²²⁾も発行した。社会事業に関わる様々な研究書・調査書の中で、宗教と直接かかわる書籍は、『日本基督教社会事業史』⁽²³⁾が唯一である。それは、日本の社会事業史の中でキリスト教が重要な位置を占めていることを示している。本著は第一分冊という扱いで思想を中心に取り扱っているが、竹中の本来の狙いは社会事業活動の様々な部門を続々と紹介することにあつた⁽²⁴⁾。しかしそれは実現しなかったし、実現しなかった理由について詳しく知ることができない。

以下では、『日本基督教社会事業史』を中心に、その他竹内愛二と供述した『現代基督教会と社会問題及社会事業』（日本組合基督教会社会部、1931年）、『福音の社会的行者：日本組合基督教会並同志社関係者社会事業家例伝』（日本組合基督教会事務所、1937年）などの著書といくつかの論文を用いて、社会事業との関連で竹中が日本のキリスト教をどのように考えたかを概観し、論評する。

1 明治文化とキリスト教

明治維新政府は、富国強兵、殖産興業、脱亜入欧をスローガンにして西洋の科学、技術、教育などの文物を積極的に取り入れた。しかし、同時に精神的面からは、和魂洋才を堅持し、西洋のキリスト教については警戒する方針を固めた。そこでキリスト教が、「何故に近世日本の思想的、社会的発展に対して、一つの歴史的必然性を持ち、又客観的社会的に漸次一定の地歩を占めるに至ったか」という問いが生じる⁽²⁵⁾。竹中はその問いについてまず明治初期の社会と文化の特質にキリスト教、とりわけプロテスタントの特質が相応するところがあったと分析した。

維新の変革に依って新に出現したる政治的、社会的自体、特に変則なる初期資本主義の展開に応じて、新たに自己の運命を開拓すべき状態に置かれた新興の中産階級に対して（中略）西欧に於ける資本主義の成立発展に対して一定の関係を有し、その倫理的規定を構成したるプロテスタントの宗教倫理思想が、在来の儒教、仏教に欠如したる新鮮な活力ある精神として感受された事は自然であると言わねばならない⁽²⁶⁾。

宗教改革運動をその起源にするプロテスタントは、社会的には封建的身分制度を打破し、経済的には資本主義の成長に寄与した⁽²⁷⁾。またプロテスタントの発展の過程で精神的には個人主義、自由主義の発達を促進した。そのような歴史の中で獲得してきた特質によってキリスト教は、明治維新以来、文明開化、自由民権、資本主義経済に目を覚ました新興中産階級と知識階級に新しい進歩思想として認知された。

明治維新以来、日本が西洋から受け入れた思想体系として、竹中は三つを挙げている。第一がドイツ流の国権派であって、その代表的な学者は加藤弘之であり、伊藤博文らによって大日本帝国憲法の制定にも大きな影響を与えた。第

二は、そうした国権派に対立したフランス流の自由民権派である。これは、明治維新以来の市民社会に大きな感化を与え、自由民権運動という政治運動としても具体化された。キリスト教との関連で注目されているのは、竹中によると、明治初期の日本のプロテスタントが、「個人の自由、市民の平等、人権の天賦に並行し接近せる宗教的倫理的教義を抱蔵し、又その実践に於いて市民的中産階級の社会的進出を支援し、平民の解放上昇を援助強調」したことである⁽²⁸⁾。第三は、イギリス流の「個人主義的自由主義経済学と功利主義の社会哲学」⁽²⁹⁾であり、その代表的な人物として、福沢諭吉が挙げられる。イギリス由来のこのような思想は明治初期から中期まで日本の経済発展、資本主義の形成に大きな影響を与えたが、一方では、それらが掲げている天賦の人権、人間の自由と平等といった理念は当時のキリスト教が伝えていたメッセージと相通じるところがあった。

端的に言えば、明治政府は、政治的には新政府を中心に国権を確立し、社会的には従来の封建的身分制度が壊れ、資本主義が勃興、成長する国家的社会的課題に西洋文物の積極的な輸入によって取り組んだのである。しかし、竹中は次のような見方を示している。すなわち、徳川幕府の宗教政策を継承した明治新政府はキリスト教を排斥したが、欧米の経済主義や社会思想、文化と深いつながりを有していたプロテスタントはそういった西洋文物の受容に積極的だった新興市民階級と共鳴するところがあったと。そうした明治文化とキリスト教との関連を前提に、竹中は具体的に日本のキリスト教の社会活動を説明している。

2 宣教師の社会事業

明治日本にキリスト教がその独自の影響力を与えることができたのは、まず宣教師の活動によるところが大きい。明治期宣教師の活動について、竹中は次のように説明する。

幕末より明治初期にかけて来朝した西洋人中、基督教宣教師はその数に於ては比較的少数であったが、その人物識見に於ては明治政府が招聘した他の技術家達に劣るものではなかつた。加之、我国の一般文化水準に比して彼等の本国の文化は著るしく進歩していたため、彼らは海外知識の紹介者として、又教育事業、医療事業、其他社会的文化的新企画の創始者として、その宗教宣布の本来目的以外に国民によつて関心を持たれ、利用されたのである。而してそれに答ふる彼らは真率、熱心にあらゆる布教以外の努力をも、その布教目的と人道主義のために惜しまなかつたのである。⁽³⁰⁾

キリスト教宣教の根本的な目的は、福音の伝播である。一方で、それは派遣された宣教師の背景にある西洋文化と宣教師を受け入れた国の文化との接触を意味する。それは日本の場合、次のように表れたと考えられる。第一は人格神、罪惡、贖罪などの新しい宗教概念の伝達、第二は教育特に女子教育と女性の社会的自覚、第三は社会的な救護活動によって人道主義と進歩主義を具体化し、⁽³¹⁾また有志者を覚醒させたことである。竹中が宣教師の社会事業活動の中で深い関心を見せたのは医療活動であつた。

医者資格を持つ宣教師たちが、福音伝道と共に医療活動を行うことが医療宣教である。医療宣教師たちは、近代医学が発達していない地域における医療活動について、新約聖書で記されている癒しの奇跡を現代で再現することと解し、その治療の成果は神からの賜物として認識した。⁽³²⁾同時にキリスト教を敵対視する人々に対して、患者が次々と治る光景は、西洋人に対して、またキリスト教に対してもその反感を緩和、福音伝道も容易にする結果を生み出した。⁽³³⁾このような医療宣教師の活動は、キリスト教と社会事業との関連として二つの意義があつたと言える。まず宣教師の医療事業は、キリスト教倫理の実践として、そもそも科学と人道主義が結びついた結果だつた。科学と人道主義の結合は、竹中のキリスト教理解で前述したように、近代社会事業において欠かせな

い性格である。したがって医療宣教は、「近代科学の応用と人道主義的立場による施医事業、病院事業、監獄改良事業、児童保護特殊教育事業は、その意味に於て新しい社会事業の出発と発展の創始促進⁽³⁴⁾」でもあった。もう一つの意味は、キリスト教という宗教と進歩主義との結び付きだった。「基督教が近世泰西文化の媒介者たり得る進歩的宗教である」ことと「泰西文化の社会的倫理的基底に基督教が存在し、その表現は人道主義、社会的理想主義として一国文運の進歩に不可欠なること⁽³⁵⁾」を体験的に明治初期の日本人に刻印させたのである。

3 日本キリスト教と社会思想

日本のキリスト教が日本社会に影響を及ぼしたもう一つの分野は、社会主義思想である。竹中がまず注目しているのは、同志社で活動していた宣教師ラーネッド (Dwight Whitney Learned) であった。ラーネッドは、同志社英学校の教師として、日本で初めて経済学を教え、その講義内容が『経済新論』(任天書屋、1887年)として出版された。竹中は、ラーネッドがこの講義の中で、決して社会主義を肯定しているのではなく、自由主義的な立場から社会主義を紹介したと分析しているが⁽³⁶⁾、ラーネッドのこの講義の意味は決して軽視できないという。なぜなら、それは一人のキリスト教宣教師が日本の自由主義経済学の構築に貢献したことであり、ピューリタンのキリスト教思想が資本主義と自由主義という社会現実と交錯することを示した。また、ラーネッドの授業と思想は、キリスト教信仰が社会倫理的問題に無関心でないことを日本人に教えたからだった⁽³⁷⁾。その影響を受けた代表的な人物が安部磯雄であり、安部磯雄は、ラーネッドが日本で初めて「社会主義」という言葉に言及した人として紹介している⁽³⁸⁾。

しかし、日本で社会主義が台頭した背景には、明治産業革命に伴う労働者の生活不安や貧民の急増など、様々な社会問題の浮上がある⁽³⁹⁾。1898年10月、村井知至、安部磯雄が中心になって「社会主義研究会」が結成された。そこに参加

竹中勝男は日本のキリスト教をどのように理解したか

した人々は、佐治実然、神田佐一郎、岸本能武太、豊崎善之助、新原俊秀、片山潜、金子喜一、河上清、幸徳秋水であり、その多くがキリスト者であった。このように日本の社会主義研究がキリスト者によって始まった事実について、竹中はこう評価する。

我国に於て基督教が社会問題に関心し、社会改良、社会事業の開拓的人物を輩出するに至つたのは、単にそれが社会主義の連絡すべき都合よき「あり合せの思想材料」としての意味に於てのみ理解さるべき動向ではなかつたと言はねばならない。基督教徒が中心となつて社会主義研究会が生まれた事實は、寧ろそれ等の基督教徒が当時に於ける欧米の基督教会に新鮮にして力強き倫理想の根幹を培つた人道主義的、理想主義的、社会的信仰の影響を受けたところに依るものと解し得られる。⁽⁴⁰⁾

竹中は、社会主義研究会をキリスト者が主導した事実が、「あり合せ」ではなく19世紀欧米のキリスト教の動向と運動の影響によるものであることを強調し、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカの主要なキリスト教社会運動と社会思想を紹介する。⁽⁴¹⁾ そうした思想と運動の影響の下で、社会主義思想と関連する何人かの人物を取り上げる。前述したように、同志社のラーネッドは、学生にキリスト教が社会に対して無関心ではないという、社会意識を教えた。⁽⁴²⁾ 小崎弘道は、『六合雑誌』を通して、社会主義とマルクスの思想を日本で初めて紹介するなど、社会主義者ではなかったが、キリスト教の社会的実践に対しては進歩的な立場を示した。⁽⁴³⁾ 小崎以外にも、徳富蘇峰、村井知至、安部磯雄のような人物は、同志社でラーネッドと新島襄よりキリスト教を学び、キリスト教的人生観、社会観を持つことになった。彼らはそのうえ、ヘンリー・ジョージ、ベラミーなどのキリスト教社会主義者から影響を受け、社会的不平等、貧困、経済的差別などの社会問題に真剣に取り組んだ。彼らは、「キリスト教思想に

出発して我国に於ける社会改造思想の先駆者たる運命を担⁽⁴⁴⁾い、そうした同志社で学んだ人物たちに「片山潜、高木正義、岸本能武太、豊崎善之助、石川三四郎、内村鑑三、西川光次郎（ママ）、木下尚江、河上清、山路彌吉⁽⁴⁵⁾」などのキリスト者が加わった。そのような人々は、キリスト教信仰という側面から見れば実に多様であり、教派教会の信仰から離れた人々もいた。しかし、彼らは自らキリスト教を信頼していて、キリスト教的理想、すなわち博愛、平等、人道主義などを実現するために最も適した思想を社会主義から見出し、その研究と実現のために働いたのである。⁽⁴⁶⁾社会主義研究会は、1900年に社会主義協会に改組し、幸徳秋水らなどマルクス主義者との葛藤も生じるが、その意義自体には変わりがない。つまり、日本の社会主義思想の始まりと展開に日本のキリスト教は開拓的に足跡を残したのであると竹中は評価した。

4 日本のキリスト教と社会事業

日本のキリスト教と明治社会との関連は、社会主義思想の導入と発展という思想的な面に止まるのではなく、実際の社会事業においても開拓的で、基礎を築いた。竹中は、キリスト教が明治初期の日本の社会改良事業に起源的な意義を持つ活動を次のように整理した。

- ①文明開化時代の宣教師の社会的活動と医療宣教
- ②ベリー（John Cutting Berry）、原胤昭、留岡幸助などによる監獄改良、教誨事業
- ③石井十次の岡山孤児院と、ジョージ・ミュラー（George Fredrick Müller）の影響を受けた人々の孤児、貧困児童、特殊児童の教育事業
- ④「社会主義研究会」とその会員による社会矯風教化事業、無産者階級の社会的、政治的上昇運動
- ⑤初期宣教師及び安藤太郎、根本正などによる禁酒運動と、女子宣教師及び矢島楯子、潮田千勢子などによる社会矯風事業、救世軍の廃娼運動と婦人

救済

- ⑥バチェラー（John Batchelor）によるアイヌ教化事業
- ⑦八濱徳三郎、青木庄藏による職業紹介事業、賀川豊彦による貧民改良及び労働者保護事業など
- ⑧カトリック教会による育児、医療事業⁽⁴⁷⁾

上記の社会事業の中で、竹中が最も高く評価しているのは、石井十次と留岡幸助だった。その中で石井十次に対する竹中の理解と評価を確認する。「近世の日本に於ける社会事業は、孤児教育から始まり、孤児教育は岡山孤児院が先駆をしたものである。しかもその岡山孤児院を創立した者は石井十次君であるから、石井君が日本の社会事業に於ける位置は極めて重要なものである事が解る⁽⁴⁸⁾」。これは、山室軍平の言葉を借りて、竹中が石井を評価したものである。竹中は石井十次の社会事業の意義について三つをあげる⁽⁴⁹⁾。一つ目は、日本国民一般の関心を新しく慈善救済事業に喚起したこと。二つ目は、石井の孤児教育事業が、慈善救済活動において新しい思想的・社会的観点を与えたこと。より具体的に言うと、石井は救護活動の背景になる思想だけでなく、その方法においても教育的観点を取り入れたことを高く評価する。三つ目は、石井の宗教的情熱、つまりキリスト教信仰が人道主義と結びついて、具体的・現実的な社会活動として結実した面である。

それでは、石井十次がそのような活動ができたのはなぜなのか。竹中は何より石井の精神、つまり思想的背景に注目している。その思想的背景の中で、最も重要なのはキリスト教信仰である。彼のキリスト教信仰は、神による天地創造、人間の罪とそれを赦すイエス・キリストの十字架の贖罪愛を信じる福音主義的なものだったが、その信仰を伝道と社会事業として表現する「⁽⁵⁰⁾実行的基督教」だった。もう一つの思想的背景は、ルソー（Jean-Jacques Rousseau）の『エミール』⁽⁵¹⁾だった。石井は、エミールから感化を受け、孤児院の教育において自然教育を重んじ、自発的な人格形成のために働いた。また、石井の思想

に影響を及ぼした人物としては、ジョージ・ミューラーとウィリアム・ブース (William Booth)、二宮尊徳が挙げられる。⁽⁵²⁾ 竹中からすると、石井は一方ではキリスト教信仰に根付いた人道主義、他方では西洋の自由と人格尊重の思想、それから19世紀後半の西洋のキリスト教社会改良主義的な事業の特色を、明治中期日本社会の救護を必要とする時期において見事に具現したものであった。その意味で、明治中期までの日本の社会事業におけるキリスト教の精神を体現した先駆者として竹中は評価している。

以上の内容から、竹中が日本のキリスト教をどのように理解したかは次のようにまとめることができるだろう。日本のキリスト教、とりわけプロテスタントは、その歴史的な特質によって、明治初期の日本社会が置かれていた状況と相応した。文化的、宗教的な隔たりを取り壊すために、宣教師の医療、教育など社会事業が大きな働きをした。産業革命を経験しながら、社会的に人道主義を実現し、様々な社会思想を発展させ、社会事業を行ってきた西洋のキリスト教は、日本にも影響を与えた。その結果、日本のキリスト教は、福音伝道だけでなく、宗教的人道主義と平民主義に基づいて、要救護性を持つ様々な人々のための社会事業の開拓的な役割を担った。そうした流れで、社会主義を日本に導入し、その基礎を作り上げたのだと。

IV 竹中の日本のキリスト教理解に対する評価

では、今まで見てきた竹中の日本のキリスト教理解はどのように評価されるべきだろうか。以下では、彼の叙述から見られる、彼の日本のキリスト教に対する認識の限界を指摘し、近代産業社会における社会事業との関連で生じる問題を明らかにする。最後に、同志社大学文学部神学科における社会事業専攻設置の意義について評価する。

1 日本のキリスト教に対する認識の限界

まず、社会事業の歴史と関連して指摘しなければならないのは、竹中が日本のキリスト教を論証する際、それが、教派的、地域的そして時代的に限られるということである。たとえば、多様な社会事業を起こした救世軍の社会事業をほとんど取り扱っていないし、1909年以来、最も積極的にキリスト教社会事業と社会運動を展開していた賀川豊彦についてほとんど紹介していない。また、湯浅治郎など安中教会のキリスト者たちが主導した群馬県における娼妓運動にも注目していないことなど、『日本基督教社会事業史』という書物の元々の性格と目的を鑑みれば、それらが不十分であることを認めない⁽⁵³⁾。また時代的には、『日本基督教社会事業史』とその他のキリスト教社会事業に関する研究は、主に明治中期である1890年代後半までの時期をその対象にしている。竹中に、なぜそのような教派的・地域的な限界があったのかについては、明確な説明ができない。ただ、時代的な限界については、日本社会の大きな変化から推察することができる。つまり、国家体制的には1890年前後、大日本帝国憲法の公布と施行、「教育ニ関スル勅語」の渙発後、国家主義の膨張と天皇制の確立に伴い、日本のキリスト教がかつてのような影響力を失い、先駆的な社会活動ができなくなった。経済的には、産業革命がある程度完成した1890年代後半以降の日本社会は複雑になり、そうした複雑な社会における社会事業は、より専門的で、自然科学と社会科学的方法を用いた活動が必要とされた時代になった。そこでキリスト教に要求される社会事業は以前とは異なると竹中は捉えていたから、時代としては明治中期に限定したのではないだろうか。

2 社会事業の概念と特質に関連して

日本のキリスト教の社会事業の歴史について、竹中の叙述が明治中期で止まった理由は、日本社会の変化に応じた結果だと述べたが、それは竹中の近代社会事業についての理論と関連がある。竹中にとって社会事業は、時代に応じ

たものでなければならない。それから産業革命以前の日本社会とそれ以降の日本社会には、社会科学の見地からすると大きな変化があった。竹中は前述した明治初期の日本のキリスト教が行った社会事業の①から⑦について、次のように評価している。

そこに共通する性格は、所謂今日の社会事業なる概念に対応する専門化し、部門化した社会活動ではなくて、直接に宗教的人道的愛隣の信仰思想を基礎とした社会事業として出発した点である。それは（中略）基督教的爱隣人道の信念情操がその時代の必要に応じて、自由に自発的に、社会改良的实践として表現し来つたところのものである。従つてそこには必然に時代の性格、時代の思想が反映されて居る。それ故にプロテスタント社会事業は時代の思想、国民の文化に直接の関係交渉を有するものであり、文化史的意義がより顕著であると考へられる。⁽⁵⁴⁾（傍点は、筆者によるもの）

竹中にとって「今日」は、産業革命以前の明治時代とは違う時代を意味し、この時代に要求される社会事業の概念も内容も違うものだった。日本のキリスト教の社会事業は、それぞれの時代の必要に応じるものでなければならないのであって、産業革命以来、大きな変化があった時代には、また変化した社会に応じた社会事業が必要であると、竹中は認識している。

それでは、竹中が言う「今日の社会事業の概念」とは何なのか。言い換えれば、竹中の時代における社会事業とは何か。社会事業の概念形成においてキリスト教の人道主義的な慈善行為と文化活動が、歴史的には非常に重要な意味を持っていた。しかし近代資本主義社会における社会事業にとって、もっと重要なのは、国家の社会政策と関連法律であり、それから社会問題の認識と分析の方法として社会科学を取り入れることであつた。⁽⁵⁵⁾当時の社会事業の変化の傾向を竹中はクイーンとワーナー⁽⁵⁶⁾を引用して次のようにまとめた。「(一) 社会事業

客体に対する人道主義的接近から客観的科学的把握へ（二）社会事業の特殊部門的分業化（三）社会事業の範囲の増大（四）社会問題定義の変化（五）要救護性に関する解釈の変化（六）専門的技術的標準の設定と社会事業教育⁽⁵⁷⁾。要するに、人道主義の発露から始まった社会事業の概念は、資本主義産業社会では社会科学の発展に伴って極めて専門化、分業化した。そのように変化した社会と時代に、以前には先駆的役割を遂行した日本のキリスト教の社会事業の位置と意義にも変化が求められるのである。

社会事業において以前のように先駆的、主導的活動ができなくなった日本におけるキリスト教社会事業は、「一種の私的社会事業」としてみなされると同時に科学的知識、社会科学的方法、法的手段に頼らざるをえない。それを踏まえてキリスト教が持っている独自の人生観と隣人愛を主体的に発揮する必要があった⁽⁵⁸⁾。近代産業資本主義社会のキリスト教と教会に求められるのは日本においても、「宗教的なる世界観と人生観なくして解決されざる問題が現代文化と社会に潜在せる事を認め、現代社会生活に対して教会のみ大胆に深刻に批判し要求する」ことだった⁽⁵⁹⁾。そうすると、キリスト教と教会の最も根本的的使命と機能は、より宗教的なものになる。世俗化していく近代社会における教会の使命について竹中は次のように述べた。長くなるが引用する。

教会の有すべき第一の使命は、その宗教的的使命である事は論を待たない。もしこの宗教的的使命の自覚が無いならばそれは教会の致命的な危険であり、社会的福音も無意義なる声に過ぎなくなるであろう。教会は信仰の鮮明と宣布に於て、信仰に基礎つけられた真理と自由の要求に於て、それ自身の存在が、近代社会に於ては、根本的なる社会事業の役目を演じて居るのである。然もその存在は社会事業といふやうな目的のためにではなくて、信仰それ自体のためのものである時に、教会のみ、そして他の如何なる団体組織によつても代用出来ないその独自の根本的なる課題と機能を発見し、

それを現代社会に生かし得るのである。それは神なき現代社会人心に神を
覚び醒し、利得のための利得追求の資本主義社会に、人格の尊厳と人格的
価値の追求を要求するのである。警戒すべき事は、教会がこの第一の課題
を没却して、社会政策、社会事業の素人芸に墮する事である。⁽⁶⁰⁾

キリスト教と教会が自分の宗教的使命に忠実であること自体が、神を認めない現代社会、利潤の追求を優先している資本主義社会に対する根本的な社会事業であると、竹中は日本のキリスト者に訴えていたのである。しかし、このようなキリスト教の使命観は、極めて抽象的であり、教会の活動の方向性を内向きにしてしまう可能性もある。例えば、社会でどのような問題があったとしても、キリスト者と教会が信仰の確立、キリスト教伝道に力を入れている限り、一応そのキリスト者と教会は、自分の使命に忠実であったとの認識が許されてしまうことになる。

また、このような日本のキリスト教理解は、国家との関係について、キリスト教と教会の社会に対する態度を受動的のものに制約してしまう問題がある。竹中は近代社会事業の特質として、宗教組織が統制組織としての公共団体に対して協同的、従属的に立っていることを挙げた。その公共団体に頂点に立っていたのが日本の場合には、天皇であり、しかもそれは事実上、宗教的な性格を持っている国家権力であった。つまり、竹中の近代社会事業理論にしたがえば、キリスト教社会事業を含めてすべての私的団体事業は、天皇制国家主義に協同的、従属的でなければならなかった。小倉襄二は、竹中の「厚生」の概念構築と理論を、戦時下の「抵抗不在」と戦争協力の論理としての的確に説明しているし、竹中および日本のキリスト教社会事業関連者たちの戦時下の歩みを鋭く批判している。⁽⁶¹⁾けれども、竹中の理解していた近代社会事業の特質、すなわち統制組織としての国家の政策と法律に対する従属性と協同性を考慮するならば、彼の社会福祉理論が抵抗の不在と戦争協力という側面を不可避免的に抱えていた

ことは否めない。

そのような問題の原因の一つとして、竹中の理論の中で日本の社会と政治に対する宗教的分析が欠如していることを指摘したい。竹中は、主にドイツ、フランス、イギリス、アメリカなど西洋列強の研究成果に基づいて独自の理論を築いていた。それらの列強は、キリスト教が国教であるか、少なくともキリスト教と国家権威がイデオロギー的に衝突しない国々である。しかし、日本の場合、大日本帝国憲法第28条によると、「日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ」キリスト教を信じる自由が許される。もちろん日本帝国も、立憲君主制として法治主義国家であったことは事実である。しかし、竹中の理論展開の中では、筆者が見る限り、宗教社会学的視座から、日本と欧米諸国のコンテクストを比較し、日本の宗教社会学的な独自性を明らかにする内容はほとんど見つからない。天皇制国家主義が軍国主義と結びつき、強化されていく1930年代の日本の状況の中で、竹中はキリスト教の第一の使命を宗教的なものとして固執したことは、日本のキリスト教が天皇制国家主義に対抗する可能性を早くも切り捨てることになってしまう。竹中は、啓示宗教として、社会と国家の罪と罪悪に向けて悔い改めのメッセージを伝え、場合によっては抵抗し、その抵抗の中で犠牲を甘受するキリスト教のもう一つの使命を全く考慮していないと考えられる。その結果、彼にとって日本のキリスト教は、国に順応する小市民のためのキリスト教になってしまう危険性があり、事実上戦時下ほとんどの日本のキリスト教と社会事業陣営は、「抵抗不在」の道を歩んだ。

3 神学科社会事業専攻からの文化学科厚生学専攻への変化について

竹中は、同志社の社会福祉学の形成に中核的役割を果たした人物として評価される。師弟関係でもあった小倉襄二は、竹中抜きには、日本の近現代社会福祉の研究、教育、実践について語れないとも評価した。⁽⁶²⁾そのような同志社社会

福祉学の出発が、1931年に同志社大学文学部神学科に「社会事業専攻」を設置したことである。それは、近代産業社会における社会事業とキリスト教との新しい関係を明確にするものだった。近代社会の社会事業は、キリスト教信仰や神学といった宗教の表現だけではなく、社会科学をその方法として用いなければならない。これはある意味で、社会事業を神学から切り離す、世俗化したとも言えよう。この世俗化は、同志社大学文学部の組織変更とそのカリキュラムから確認できる。

同志社大学文学部は、1940年4月大きな組織改編を断行した。以前文学部には、神学科、英文学科、哲学科があった。神学科内に神学専攻、倫理学専攻、社会事業専攻があり、哲学科内に哲学専攻、倫理学専攻、心理学専攻、教育学専攻があった。それが、1940年の改組によって神学科と文化学科の二つに編制され、神学科には神学専攻だけが残った。文化学科には、倫理・哲学専攻、心理学専攻、英文・英語学専攻、文芸学専攻、厚生学専攻が所属することになった。⁽⁶³⁾この改組の理由は、経費節減が大きな部分を占めているし、結果として神学科の縮小が著しく表れている。⁽⁶⁴⁾

神学科社会事業専攻から文化学科厚生学専攻への変更は、組織だけでなく教育の内容、つまりカリキュラムの改編も伴った(図1)。

1941年1月のものとして推定されるこのカリキュラムから確認できるのは、キリスト教関連科目が、必修科目として「基督教通論」、「基督教文学」、「基督教倫理学」など三つしかないことである。その一方で、社会科学関連科目は、専攻の厚生学関連科目はもとより、社会学、法学、政治学、経済学、倫理学と心理学など現代の社会福祉学専攻の大学のカリキュラムとほぼ変わらない豊かな科目を開設している。社会科学の専門的知識によって教育しようとする意図が十分窺える。その上、どの選択科目を履修するかによって、公民科教員免許状の取得の可能になっていた。⁽⁶⁶⁾つまり、教会の現場ではなく社会と教育の現場で働く人の育成に、教育の目標が置かれるようになり、キリスト教とは以前よ

竹中勝男は日本のキリスト教をどのように理解したか

り離れることを意味する。

このような変化について、政治的社会的な影響は否定できない。⁽⁶⁷⁾ 1930年代後半、「神棚事件」(1935年)、「国体明徴論文事件」(1936年)、「チャペル籠城事件」と湯浅八郎総長の退陣(1937年)など同志社は、天皇制国家主義の圧力に苦しんでいた。その結果、キリスト教主義教育はますます後退していたし、神学科の規模も縮小していた。こうした状況の中で、厚生学専攻が神学科から離れたことを世俗化として断定することには無理があるかもしれない。ところで、このような組織とカリキュラムの変更が、国家権力の圧力が主要な要因だったとしたら、その要因が解消される戦後には、キリスト教および神学との結びつ

厚生学専攻課目 担当者 時間数 (仮予定)	
<p>○東洋倫理學 (佐藤) =</p> <p>○西洋倫理學 =</p> <p>○心理學特講 =</p> <p>○經濟學史 (星川) =</p> <p>○政治學史 (星川) =</p>	<p>厚生學原理 (竹中) =</p> <p>社會學概論 (難波) =</p> <p>哲學概論 (赤田) =</p> <p>文化政策 (天林) =</p> <p>社會問題 (竹中) =</p> <p>憲法 (田畑) =</p> <p>民法總則 (松原) =</p> <p>日本精神 (松原) =</p> <p>基督敎通論 (天塚) =</p> <p>英書 (龍山) =</p> <p>獨書 (正野) =</p> <p>計 二四</p>
<p>○行政法總論 (田村) =</p> <p>○文化心理學 =</p> <p>○心理學実験 (木官) =</p> <p>○新南學 =</p> <p>○利法總論 (土井) =</p> <p>○宗教教育學 =</p>	<p>厚生專業史 (天林) =</p> <p>厚生專業特講 (竹中) =</p> <p>厚生專業實習 (竹中) =</p> <p>社會學特講 (竹中) =</p> <p>社會哲學 (天林) =</p> <p>社會調查 (天林) =</p> <p>社會政策 (天林) =</p> <p>應用心理學 (天林) =</p> <p>經濟學論 (北野) =</p> <p>基督敎文學 (富森) =</p> <p>獨書 (竹中) =</p> <p>計 二二</p>
<p>○行政法各論 (藤原) =</p> <p>○民法教義相續法 (木村) =</p> <p>○經濟政策 (星川) =</p> <p>○經濟事情 (星川) =</p> <p>○法理學 (星川) =</p>	<p>厚生專業特講 (正野) =</p> <p>厚生專業實習 (竹中) =</p> <p>厚生專業實習 (竹中) =</p> <p>社會衛生學 (天塚) =</p> <p>社會衛生學 (藤原) =</p> <p>統計學 (藤原) =</p> <p>論文 (竹中、天林、竹中) =</p> <p>計 二六</p>

図1：厚生学専攻科目・担当者・時間数 (仮予定)

きが戻される可能性も生じる。しかし戦後、竹中は同志社大学文学部の中で社会学科を確立し、「同志社社会学の建設」を目ざした。⁽⁶⁸⁾彼の社会事業と社会福祉に関する理論は、神学とは分離した社会科学の一分野として確立されている。⁽⁶⁹⁾社会事業とは何かという問いに対して、1953年の竹中は「社会事業が資本主義社会の内部構造であると同時に、その社会的矛盾疾患を超克すべき社会理念の萌芽と成長を持つものである点に論及」⁽⁷⁰⁾しているし、社会科学的な方法論を使っている。この時代になっても、社会事業の実践におけるキリスト教の意味と意義は見当たらない。このような傾向から見ると、1940年の組織とカリキュラムの変更は、世俗化の一つの過程であって、必ずしも国家権力の圧力によるものではないと考えられる。

V おわりに

竹中勝男は、歴史的にイエスの隣人愛を実践する宗教としてのキリスト教が、資本主義の諸問題に対応できると信じ、同時にまた変革を求める欧米諸国のキリスト教社会運動についても良く理解していた。だからこそ、近代産業資本主義社会では人道主義に基づいたキリスト教社会事業には限界があると認識し、公共団体の統制と法律、また諸社会科学の導入が必要であると考えたのである。しかし、それが必ずしもキリスト教精神に基づいた社会事業の展開の可能性を排除するのではない。むしろ非宗教化していく世俗社会にキリスト教の宗教観、世界観、人間観を時代に合わせて生かす社会事業を訴えたのである。

竹中は、日本のキリスト教について、明治初期の社会事業と中期の社会主義思想及び、開拓的な社会改良事業を評価した。竹中は明治初期の欧化主義時代においては、宣教師の医療事業と教育事業、それからプロテスタントの歴史的な特質として天賦人權、個人の自由、四民平等などの思想が、明治の新興市民社会に共鳴したと理解している。日本で初めて社会主義の概念と思想を紹介し

竹中勝男は日本のキリスト教をどのように理解したか

たのも日本の宣教師と知識人であり、明治中期産業革命の進展と成熟に伴う日本社会の諸問題に、思想的にも実践的にも先駆的に対応し、社会の要救護性に取り組んだ日本のキリスト教は、実に大きな貢献を成した。しかし、日本のキリスト教の社会活動に対する竹中の理解は、教派的、地理的、時代的な限界があると認めざるを得ない。また、近代産業社会における社会事業の専門化、部門化を追求すると同時に、キリスト教の第一の使命を宗教に置くことは、日本のキリスト教と教会を抽象化、内面化させ、教会の活動を社会の諸問題から離させる恐れがある。そのように社会事業における科学的専門性を求めた結果の一つが、同志社大学神学科の中で社会事業専攻を設置したことであり、それは徐々に社会事業の世俗化に傾いたと言える。

今後の研究課題として、以下の二点を提示したい。一つ目は、竹中が彼の社会福祉理論を確立していく中で、キリスト教はどのような地位を占めたのかということ。それは戦後に神学部から独立した社会学部においてキリスト教が担っている役割を明らかにするとともに、竹中と同志社、キリスト教社会事業、社会福祉の間の関連性を検証する作業にも繋がっているように思われる。二つ目は戦前・戦時下のキリスト教社会事業が日本の教会にどのように理解されたのかということ、またその関りを調べることである。

注

- (1) 竹中勝男の先行研究については、梅木真寿郎「竹中勝男の基督教社会事業：概念構成と思想をめぐって」『キリスト教社会問題研究』第66号、2017年、73-76頁に紹介されている。本稿では、小倉襄二「書評：竹中勝男教授『社会福祉研究』」『人文学』第4巻、1951年、177-188頁だけ追記しておく。
- (2) 梅木真寿郎、同書、73-106頁。
- (3) 同書、89頁。
- (4) したがって、ラウシェンブッシュが *Christianity and Social Crisis*, New York: Macmillan, 1907で提示した問題に対する次の課題は、「我々が何をすべきであり、何をしてはいけないのか」であって、その問いの結果として著したのが

Christianizing Social Order, New York: Macmillan, 1912である。

- (5) W. Rauschenbusch, *Christianizing Social Order*, New York: Macmillan, 1912, p. 125.
- (6) 竹中勝男「近世に於けるキリスト教応用の問題」『基督教研究』第6巻1号、1928年、126-127頁。
- (7) 竹中勝男・竹内愛二『現代の基督教会と社会問題及社会事業』日本組合基督教会社会部、1931年、1頁。
- (8) 竹中勝男「近世社会的基督教の起源に関する研究（一）：英国基督教社会主義に就て」『基督教研究』第13巻1・2号、1935年、134頁。
- (9) 竹中勝男「経済史観の社会学的一考察（一）」『基督教研究』第8巻1号、1930年、117-134頁。
- (10) 同書、117-118頁。
- (11) 竹中勝男「資本主義経済組織の倫理的批判：ウワード教授『現代の経済道徳と耶蘇の倫理』について」『基督教研究』第6巻3号、1929年、99-120頁。
- (12) 同書、99頁。
- (13) 同書、108頁。
- (14) 同書、115-116頁。
- (15) 竹中勝男「現代の社会事業と基督教」『基督教研究』第8巻3号、1931年、89頁。
- (16) 同書、93頁。
- (17) 同書、94頁。
- (18) 同書、96-97頁。
- (19) 同書、99-98頁。
- (20) 同書、87頁。
- (21) 同書、101頁。
- (22) 雑誌『厚生問題』は、『社会と救済』というタイトルで、1917-1921年中央慈善協会から発行がはじまり、1921年からは『社会事業』に名称を変更して、その後は社会事業協会によって1941年まで続けられた。1942年からは、中央社会事業協会社会事業研究所がそれを引き続き、雑誌名を『厚生問題』に再び変更したのち、1944年の廃刊まで刊行を続けた。
- (23) 中央社会事業協会については、渡邊かおり「戦前の社会事業研究所における研究活動」『愛知県立大学教育福祉学部論集』第68号、2020年、67-73頁を参照。
- (24) 竹中勝男『日本基督教社会事業史』中央社会事業教会社会事業研究所、1940年、自序2頁。
- (25) 竹中勝男『日本基督教社会事業史』中央社会事業協会社会事業研究所、1940年、2頁。
- (26) 同書、3頁。
- (27) このプロテスタントイズムと近代資本主義の関係に対して、竹中はマックス・

- ウェーバー理論に従っている。竹中勝男「プロテスタントの倫理と資本主義の『精神』との関係」『基督教研究』第10巻1・2号、1932年、161-194頁。
- (28) 竹中勝男『日本基督教社会事業史』13頁。
- (29) 同書、14頁。
- (30) 竹中勝男「近世日本社会事業の起源に対する基督教的貢献（上）」『基督教研究』第14巻1号、1936年、49頁。
- (31) 竹中勝男「本邦近世社会事業の先駆者としての宣教医」『基督教研究』第15巻1・2号、1937年、167-168頁。
- (32) 同書、170頁。
- (33) 同書、171頁。
- (34) 同書、169頁。
- (35) 竹中勝男『日本基督教社会事業史』、139-140頁。
- (36) 同書、18-19頁。
- (37) 同書、19頁。
- (38) 安部磯雄『安部磯雄自叙伝：社会主義者となるまで』改造社、1932年、102-103頁。
- (39) 竹中は、『日本基督教社会事業史』51-71頁で、日本の産業革命について説明し、1897（明治30）年前後にある程度完成したとみなしている（57、63頁）。しかし、これは日本の産業革命が1901年から1910年にかけて達成されたとみる今の通説とは隔たりがある。大石嘉一郎「産業革命」『日本歴史大事典』小学館、2007年。
- (40) 竹中勝男『日本基督教社会事業史』、77-78頁。
- (41) この段落は、同書、81-99頁の内容の要約である。
- (42) 同書、101-102頁。
- (43) 同書、104頁。
- (44) 同書、107頁。
- (45) 同書、107頁。
- (46) 同書、107-108頁。
- (47) 同書、131-132頁。
- (48) 小野田鉄弥「石井十次傳」、山室軍平序文1頁（ママ）。同書、140頁から再引用。
- (49) 同書、140-141頁。
- (50) 同書、142-143頁。
- (51) 同書、144頁以下。
- (52) 同書、147-150頁。
- (53) 明治中期までの日本キリスト教の概観的な理解のためには、阿部志郎・岡本栄一編『日本キリスト教社会福祉の歴史』ミネルヴァ書房、2014年、53-99頁を参考。
- (54) 竹中勝男『日本基督教社会事業史』、134頁。
- (55) 竹中勝男「社会事業概念構成の基準に関する一研究」『基督教研究』第12巻1号、1934年、13頁。

- (56) Amos Warner, Stuart Queen and Ernest Harper, *American Charities and Social Work*, New York: Thomas Y. Crowell, 1930.
- (57) 同書、16頁。
- (58) 同書、21頁。
- (59) 竹中勝男・竹内愛二『現代の基督教と社会問題及び社会事業』日本組合基督教教会社会部、1931年、59頁。この本の前半は竹中勝男が著し、後半は竹内が書いたもので、近代社会におけるキリスト教と社会事業の関係に対する思想は、竹中のものとして見なければならぬ。特に、竹中はこの本の中で「社会的基督教」について厳しく批判し、警戒している(10-11; 18-21; 58頁)。梅木は、「社会的基督教」との決別を1933年として見ているが(梅木真寿郎「竹中の基督教社会事業」87-89頁)、実はその決別は1931年以前にあったと見るか、もしくは最初から「社会的基督教」の同調者ではなく研究者としてみなした方が妥当だと考えられる。
- (60) 同書、57-58頁。
- (61) 小倉襄二、「キリスト教社会事業の論理：厚生事業体制と「抵抗」の問題」、同志社大学人文科学研究所編『戦時下抵抗の研究Ⅱ』みすず書房、1978年、124-127頁。
- (62) 小倉襄二「私の追憶の仲で竹中勝男先生：“同志社派”の検証として」『同志社時報』第93号、1992年3月、120-121頁。
- (63) 同志社社史史料編集所編『同志社百年史：通史編2』同志社、1979年、1172-1173頁。
- (64) 同書、1173-1174頁。
- (65) 『教授會記録 至昭和十五年四月 至昭和十七年三月』同志社大学神学部所蔵資料。この史料は、日誌のような形で同志社大学文学部神学科の教授会議の内容を簡略に記録として残したもので、所々大学関連の配布資料が挿入されている。このカリキュラムは、1941年1月10日と13日の記録の間に挿入されていた。同志社大学神学部から史料の掲載許可を得ている。
- (66) 同志社社史史料編集所編『同志社百年史：資料編2』同志社、1979年、1385-1386頁。
- (67) 同志社社史史料編集所『同志社百年史：通史編2』、1175-1176頁。
- (68) 竹中勝男「同志社社会学の建設をめざして」『人文学』第4号、1951年、序文。
- (69) 竹中の研究の集大成が、博士論文でもある『社会福祉研究』(社会学叢書第四冊：関書院、1950年)であるが、この論文で、竹中は社会福祉を諸社会事業の目的概念として理論化しているが、その方法論はあくまでも社会科学的、歴史的なものである。
- (70) 竹中勝男「社会事業の基本的性格」『人文学』第11号、1953年、4頁。

(第20期第1研究会による成果)